

保育者の保育観形成に関する研究動向

－保育観の形成や変容の要因に着目して－

松島英恵¹⁾＊

1) 新見公立大学健康科学部健康保育学科

(2024年9月18日受付、11月20日受理)

暗黙的、身体的に行われることもある保育の営みは保育者の保育観によって支えられている。保育観は変容しうるものであり、保育観の変容は保育実践を変容させる。保育者の保育観がどのように形成され、変容するのかの道筋を明らかにすることにより、保育観形成や変容を支える方法を開拓することができると考えられる。そこで、保育観形成や変容の要因や契機に着目して文献を検討、整理した結果、①社会的状況②学んだ理論③個人的経験④保育実践上の経験⑤園内外のサポートの5つの要因が抽出された。それぞれの要因が絡み合っ

て形成や変容につながるものであるため、保育観の形成や変容の過程を詳細に捉える研究が求められる。

(キーワード) 保育者、保育観、保育観形成、保育観変容

1. はじめに

「幼稚園教育要領」¹⁾等でも示されているように、保育現場において子どもの主体的な活動を確保するように求められて久しい。社会の一員として自分の人生や社会をより良いものにしていこうとする力を子どもに育成する為には、子どもの主体性を尊重し、周囲の人と協働していく経験を積み重ねることが必要となる。保育者は、乳幼児自身が表現しきれない思いを読み取り、取捨選択しながら保育を進めている。子どもが保育の主体であるという感覚をもたなければ、子どもの思いは保育者の理想や思い込みに飲み込まれ、子どもが自分自身で考えようとする力は育ちにくい。保育者ももう一方の主体であるという感覚がなければ、周りの人と一緒に生活や遊びを進めようとする社会の一員としての態度は育ちにくい。子どもも保育者も主体であるという感覚をもって子どもと一緒に遊びや生活を展開していけるように、保育の質を向上させていく必要がある。

古賀は、保育実践は保育者の「前言語的理解」と「身体的応答性」が発揮されると述べている²⁾。小川は、援助する瞬間に理解するような保育者の理解を「当事者的直観」と呼び、思い込みだけで幼児にかかわる姿勢につながる問題点を指摘し、第三者的視点をもつこととそのための省察の必要性を唱えている³⁾。また松本は、「保育中の瞬時の判断や子どもへの援助方法、声掛け等」の決定は保育者の保育観によって大きな影響を受けるとし、保育観については「保育に対する見方、考え方」であり、「保育者の保育行動の根幹」であるとしている⁴⁾。つまり、言語化が難し

く暗黙的、身体的に行われることもある保育の営みは、保育者自身の背景や経験等によって形成される保育観に支えられており、その保育者の保育観は省察を重ねることによって変化するということである。そのため、保育の質の向上には省察を通した保育観の変容が必要となる。省察の方法としては、鯨岡が推奨するエピソード記述⁵⁾や吉村が推奨する語り⁶⁾の他に、園内外での研修など様々な方法が提唱されている⁷⁾が、省察の効果と共に、保育実践者が感じる物理的・心理的負担感や難しさについても指摘されている。省察の重要性の認知が進む一方で、省察の方法の新たな開拓も求められている。

前述の松本は、保育者の保育観に関する研究動向を探り、保育観の定義の捉え方について4つに大別して整理した上で、保育者が自身の保育観を「仲間」との関係の中で語り合うことで意識化し、少しずつ形を変えるものであるという考えを紹介し、学生の保育観形成過程への支援と、社会変動と保育観の関係性の検討を課題とした⁴⁾。蓮井・中平他は、幼稚園教諭・保育所保育士としての保育経験の違いに着目して保育教諭の保育観に関する研究動向と課題を明らかにしている。認定こども園への移行が進む現在、保育の質の向上には「保育観の共有」が、円滑に協働するためには保育経験による保育観の相違を踏まえた検討が必要であるとしている⁸⁾。保育者がどのような影響を受けて保育観を形成し、どのような契機や経験によって保育観を変容させてきたのか、その道筋を明らかにすることは、保育者養成や保育者研修方法の開拓に示唆を与え、保育の質の向上につながると期待される。そこで本稿では、保育観形成や変容の要因や契機に着目して文献を検討、整

＊連絡先：松島英恵 新見公立大学健康科学部健康保育学科 718-8585 新見市西方1263-2

理し、新たな課題を見出すことを目的とする。

II. 研究の方法

研究論文（学会の発表要旨、雑誌記事を除く）を対象に CiNii Researchにおいて、「保育観 形成」「保育観 変容」「保育観」のキーワードで文献検索を行い、該当した論文のうち本稿のテーマに沿った論文を選定した。その結果52本の論文（表1参照）を今回の分析の対象とし、保育観の形成過程や変容過程を促す要因について抽出し、分析を行った。

III. 結果と考察

対象の論文を整理した結果、制度も含む国や社会の変化等の①社会的状況、保育者養成校などで②学んだ理論、生育歴や育児経験等の③個人的経験、子どもとの関わりや昇進など保育者となつてからの④保育実践上の経験、仲間との関係を含む⑤園内外の研修サポートの5つの保育観形成や変容の要因が抽出された。

III-1. ①社会的状況

制度も含む国や社会の変化等の社会的状況が保育観の形成や変容の要因になると指摘している研究は、表1の1、3、4、7、8、10、12、13、14、15、16、18、21、24、27、28、30、33、40、42、47である。井上は明治初期からの日本の保育観の歴史的変遷を探り、国家や社会の教育観が大きな影響を与えることを指摘した。明治初期から戦後にかけて、子どもは大人によって保護されるべき存在であり、大人に従うべき存在としてみなされており、大正自由教育の時代に倉橋惣三が幼児中心の教育を提唱するも、戦争の影響による皇国主義的な保育が強化された。戦後の教育改革で「幼児中心」という文言は出されるが、子育ては家庭によるものであり、保育施設は家庭保育の補助的役割とみなされる傾向にあった。そのような社会の状況によって、大人の望む子どもを育てていくために、しつけを中心とした家庭教育と同様の大人のための保育観が醸成されたと述べている⁹⁾。戦争や大学紛争など国家や社会の状況により保育観形成にどのような影響を受けているかを自覚することが重要となるだろう。但し、田甫も指摘するように、大正自由主義教育の影響を受けて形成された保育観を戦争中も貫いた保育者の存在も明らかになっている¹⁰⁾。保育観が必ずしも社会的状況によって変容するわけではなく、個々の受けとめ方の違いも考慮する必要があるだろう。

井上を始め他の研究者も触れているが、1989年の幼稚園教育要領の大改革も保育者の保育観変容に大きな影響を与えている^{9) 11) 12)}。子どもを主体とした保育観が唱えられ、日本の保育にとって大きな転換期となった。奥山は保育者

の語りから、転換期を迎えた時の経験値や、それまでの保育への問題意識、仲間との協同に支えられたことなどが、転換期を乗り越えられた要因として明らかにしている¹¹⁾。香曾我部は、ある少子化が進む町の保育者の語りから「自由主義的な教育思潮」の強まりと「自由保育への批判」の高まりという社会的転機を「問題意識－省察－将来への展望」という連続性をもったプロセスとして認識し、実践コミュニティで共有化しながら乗り越えていることを明らかにした¹²⁾。他にも、障害児保育の導入や認定こども園への移行など行政主導の保育システムの変更に、保育観を変容させる大きな契機としてあげられている^{13) 14)}。外部からもたらされた転機は、それまでの保育観を自覚させ、見直す機会となる。奥山も香曾我部も、管理職についているようなベテラン保育者の語りに着目し、転機を迎えた時期の保育者の立場が前向きな変容に結び付いたとしている^{11) 12)}が、その他の保育者がどのように変容していったのか、どのような支えがあったのか探ることも必要になるだろう。

海外の保育観との比較研究においては、芦田・秋田他¹⁵⁾がドイツ、劉・倉持¹⁶⁾が中国、中村¹⁷⁾がデンマークの保育者の保育観を調査する中で、それぞれの文化や保育施設の制度や求められる役割が独自の保育観につながっていることを明らかにした。山田は異文化経験をもつ保育者の調査から異文化に触れることで自文化の保育観を自覚し、寛容性を拡大させることを明らかにしている¹⁸⁾。国家や社会の教育観や行政による制度の転換なども同様であるが、暗黙の内に自国の文化からどのような影響を受けて保育観を形成させているのか自覚し、捉え直すことが保育観の変容につながる。

勤務先の保育施設の成り立ちや歴史、園の保育方針も、個人の保育観に影響を与える。伊東・大豆生田は園長の語りから運動会の変容過程を探る中で、変容の障壁の要因として過去の経験や園の歴史による固定観念をあげている。固定観念を問い直すには、園長のマネジメントが重要であり、対話的な組織への変容が、保育観の変容につながる。組織の保育観や固定観念を見直すには外部から新たな視点を得ることが必要となるとしている¹⁹⁾。

保育者の保育観は個人のものであっても、社会的状況から受ける影響は大きい。無自覚なまま固定観念となってしまうこともある。どのような影響を受けているのか自覚できるようなシステムの工夫が重要となる。

III-2. ②学んだ理論

保育観の形成に関わるものとして、保育者が保育者養成施設などで学んだ理論、それにつながる授業の工夫などについて述べている研究は、表1の1、4、5、7、8、11、15、17、19、25、29、31、32、37、44、45、46、50、52である。梶田・杉村は面接法を通して保育者の個人史を調べることから保育観の形成についての質的な分析を試み、保育者個人の生育歴に関係する社会的・文化的背景として、

保育者の保育観形成に関する研究動向

表 1. 文献リスト

	著者名	論文タイトル等	保育観形成・変容の要因 ①社会的状況②学んだ理論③個人的経験④保育実践上の経験⑤園内外のサポート
1	梶田正巳、 杉村 伸一 郎他	保育観の形成過程に関する事例研究	名古屋大学教育学部紀要(37)141-162, 1990
2	入江礼子、 内 藤 知 美 他	園内研修初期段階における保育実践の変容とその諸相－特別に配慮を必要とする子どもへの注目を契機として－	鎌倉女子大学紀要(9)1-10, 2002
3	上田淑子	保育者の力量観の研究－幼稚園と保育所の保育者の比較検討から－	保育学研究(41-2)24-31, 2003
4	田南綾野	昭和 31 年版幼稚園教育要領に対する保育者の受けとめ方－ライフストーリーにみられる保育者の日常的「構え」を通して－	保育学研究(42-2)80-91, 2004
5	渡 貫 由 季 子、武藤安 子	高校生における保育観の形成とそれに影響を及ぼす要因－自我発達との関連で－	日本家政学会誌(55-2)135-144, 2004
6	佐 藤 み よ 子、数井み ゆき	乳児院保育者は「よくわからない子ども」をどのように捉えるのか？	茨城大学教育実践研究(23)225-240, 2004
7	田南綾野	保育実践者の保育観や「構え」はどのように形成されたか－ある保育者のライフストーリーを通して－	日本女子大学大学院紀要(11)35-48, 2005
8	清水陽子	保育者の保育観と実践力の形成について－阿部静江の経歴と活動を中心に－	西南学院大学紀要(9)216-223, 2005
9	中井隆司、 松良綾子	保育場面に表出する「幼稚園教諭の指導信念」に関する事例研究	奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要(14)11-20, 2005
10	芦田宏、秋 田 喜 代 美 他	多声的エスノグラフィ法を用いた日独保育者の保育観の比較検討－語頻度注目した実践知の明示化を通して－	日本教育方法学会紀要「教育方法学研究」(32)107-117, 2006
11	吉岡一志	保育士の成長を支える信念の形成過程－ある保育士のライフストーリーを中心に－	広島大学院教育学研究紀要第三部(56)101-108, 2007
12	奥山順子	保育者の資質としての「遊び」理解－保育者の「語り」にみる保育観形成過程－	秋田大学教育文化学部研究紀要教育科学部門(63)13-23, 2008
13	劉海虹、倉 持清美	日本と中国の保育者の保育観	東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ(61)51-64, 2010
14	藤木大介、 上 田 七 生 他	認定こども園への移行が保育者の保育観に及ぼした影響	梅 幸 学 院 大 学 論 集(44)11-21, 2011
15	佐藤智恵	自己エスノグラフィによる「保育性」の分析－「語られなかった」保育を枠組みとして－	保育学研究(49-1)40-50, 2011
16	小原敏郎、 入 江 礼 子 他	保育者の保育観に関する研究－保育経験年数、保育所・幼稚園の違いに着目して－	保育士養成研究(31)57-66, 2013
17	井口真美、 生 野 金 三 他	教職実践演習の実証的研究－保育観・授業観の形成を志向して－	実践女子大学生生活科学部紀要(50)21-38, 2013
18	香 曾 我 部 塚	保育者の転換の語りにおける自己形成プロセス－展望の形成とその共有化に着目して－	保育学研究(51-1)117-130, 2013
19	増 田 ま ゆ み、小櫃智 子	保育者の成長を支える子ども観・保育観の変容－実習生との保育の省察の一事例から－	日本児童学会「児童研究」(93)3-13, 2014
20	白 井 は る 奈、林悠子	対人援助者に求められる援助観－乳児保育における熟練保育士の語りの分析を通して－	佛教大学社会福祉学論集(11)11-30, 2015
21	中村絃子	デンマークの「森の幼稚園」における保育観－「詩的ファンタジー」に着目して－	お茶の水女子大学子ども学研究紀要(4)79-89, 2016
22	木戸啓絵	「森のようちえん」における他機関との連携の実態－三重県の事例から－	岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要(48)45-58, 2016
23	吉田満穂、 高 橋 敏 之 他	自伝的記憶としての気付き体験による保育者の変容過程	岡山大学教師教育開発センター紀要(6)38-48, 2016
24	山田朋未	異文化における保育経験者から見る保育観の変容と異文化体験の意義－青年海外協力隊員へのインタビューを通じて－	お茶の水女子大学子ども学研究紀要(5)105-118, 2017
25	山本佳子	保育者論が学生の保育観にどのような変化をもたらしたか	中国学園紀要(16)205-211, 2017

26	浅井 かり、浅井拓久也	保育士の保育観形成過程についての一考察—TEM 園の分析を通じて—	東京未来大学保育・教職センター 紀 要 (特 別 号)1-5, 2017	幼稚園の頃のよい思い出、自ら決断し保育者養成学校進学や保育所に勤務したこと、正規職員になって責任を感じたことが現在の保育観を変容させたことにつながる ③④
27	渡邊望、永利陽一	保育観による保育行動の違い	九州女子大学紀要(54-2) 177-191, 2017	経験年数の増加により子ども中心の保育観となっていく傾向。園の集団志向か個人志向かの違いもある。保育観は同じでも、保育行動が異なる場合もありパーソナリティも重要である ①③④
28	矢藤 誠 恭、森俊之 他	認定こども園化に伴う保育者の専門性のあり方の変化に関する研究	日本保育協会保育科学研究所「保育科学研究」(8)24-44, 2017	認定こども園化に伴う専門性について変わりがなく認識する保育者が多いが、社会的変化(認定こども園移行)による間直しにより専門性に対する意識を高めたと考えられる。幼稚園移行型では養護、保育所移行型においては教育的側面の意識変化があげられる ①
29	狩野 奈緒子	子ども理解を基盤とした「保育観」「子ども観」の再構築—援助から保育の計画を描くための学び—	桜の聖母短期大学紀要(42)125-139, 2018	実習の経過の中や振り返り、マインドマップを用いたカンファレンスの対話の中で、実習園の保育理念や指導者の保育観から生まれる保育の概観について語った上で、子どもへの援助の意味や実践の在り方を省察し、自らの保育観を再構築してい。 ②
30	松延毅	遊び中心の保育への変革は保育者に何をもたらしたのか—保育観の変容プロセスと心の揺れ—	新潟中央短期大学暁星論叢(69)25-32, 2018	遊び中心の保育への保育内容の転換の中で、これまでの問題意識、子どもの姿、迷いや悩み、保護者や地域からの反応などから様々な角度で考え、試行錯誤しながら変容し始める。保育者間の幼児理解や環境構成の相談、連携も必要。保育観の変容には心の揺れ動きが生じる ①④
31	永倉 みゆき	保育者の保育観はどのように形成されるのか—藤野敬子の生育歴に関する検討—	お茶の水女子大学子ども学研究紀要(6)33-45, 2018	両親の影響、受けた教育、宗教、保育を始めたきっかけが、保育観に影響。性格に加え様々な出会いの中で人への対し方や保育に向かう姿勢をつくる。様々な人間観、教育観等の枠組みを知り吟味することで保育観を熟成させる。弱さを自覚し人の弱さについて深く考えることも重要である ②③⑤
32	芝田郁子	教職実践演習にみられる短期大学保育科学学生の学びと変容—幼児統合ケアの実践活動を通して—	名古屋柳城短期大学研究紀要(41)117-134, 2019	多世代間交流・共生を考える授業により、子どもの見方が柔軟に変わる。学生の自主性や主体性を発揮できるようにすることも自己課題に関連して変化につながる ②
33	井上明美	日本の保育観の歴史的変遷からとらえる保育—保育の質の向上を目指して—	花園大学社会福祉学部研究紀要(28)35-44, 2020	社会的状況(国家、社会、制度)の変遷により保育の課題は変わる。国家や社会、個人がどのような保育観を持つことによって保育そのものが影響を受ける ①
34	横山卓介、岡山隆一	保育者の実践観の変容に関するヴィジュアル・ナラティブアプローチ	保育学研究(58-2・3) 155-166, 2020	保育経験を重ねるにつれて、子どもと保育者との関係を対等なものとしなすようになる「対話的な保育観」へと変容した ④
35	松本 佳代子	実習生とのかわりを通した保育者の保育観の変容に関する一考察	共立女子大学家政学部紀要(66)151-160, 2020	子ども理解を特に大切にしている保育者は、実習生の実践をみると、直接かかわることを通して自身の保育を見つめ直すしている。園の保育観を共有していない実習生による疑問や質問から、保育観が揺さぶられ、省察を重ねることが保育観の変容につながる ⑤
36	宮本雄太	附属幼稚園の保育を支える保育者の視座 福井大学教育学部附属幼稚園ベテラン保育者のライフヒストリーに基づく検討	福井大学大学院福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科教師教育研究(14) 399-414, 2021	相互主体の在り方の検討、ケアリングの姿勢、人間学的な保育からの観点、保育コミュニティの民主性と、保育者のもつ発達軸・時間軸・固有経験軸の3観点が相互に関わり合いながら視座が構成される。生涯発達の見通しの中で、保育者としての力量形成を常に模索していく必要がある。文化的状況に埋め込まれた複数の文脈の持つ「多声性」の特徴の理解が大切である ⑤
37	阿南 寿美子、命婦恭子 他	保育者養成校における保育者としての資質に関する調査—変数間の関連性の分析—	西南女学院大学紀要(25)113-122, 2021	「子ども理解」「共感性」「社会性」「援助観」が保育観を形成する要因。共感性や対人スキル、援助規範意識と関連がある。養成校において対人スキル、共感性を高める必要がある。講義内容と実習のギャップが保育観の揺れに影響する。他の要因もあるが解明は今後の課題である ②
38	三宅浩子、久保田 真規子	多様性の尊重とインクルーシブ保育—継続的な園内研修が保育者に与える影響—	宮崎学園短期大学紀要(13)109-117, 2021	研修を継続することで、問題意識の捉え方が変化し、保育者主体の研修が生成される道のりが推測された。保育者と保育の専門性を尊重し、研修主体を滑らかに保育者に渡していくような流れを生み出すことが研修講師の役割となる ⑤
39	八代陽子	前期ミドルリーダーにおける後輩との関わりと保育観の変容プロセスの一考察—TEAによる分析から—	保育学研究(60-1)161-172, 2022	個人の生の歴史詳細に描く中で、「子どもと向き合う保育観」において、ミドルリーダーが後輩と関わる中で、「私の経験に裏付けされた子どもと向き合う保育観」から、ジェンマを通して後輩への尊敬の念や後輩と同じプロセスを辿った経験を重ねたこと等により「私と後輩の関わりに裏付けされた子どもと向き合う保育観」へと質が変容されたことを明らかにした ④
40	村井尚子、坂田哲人	保育実践のリフレクションの意義に関する一考察—保育観の問い直し—	京都女子大学発達教育学部紀要(18)33-43, 2022	コルト・ハーヘンの8つの窓を用いたリフレクションを行い、行為の基盤となっている保育観を明らかにし「見直し」をすることが保育観の変容に。成育歴や園の保育方針も影響する ①③⑤
41	水野 佑規子	保育実践を支える保育者の専門性に関する一考察—保育観と保育実践の関係性に焦点を当てて—	愛知淑徳大学論集福祉貢献学部篇(12)64-78, 2022	保育実践は、研修等で学び続けることにより磨かれる明確な保育観(マクロの視点)を背景とした子どもの「発達要求」をつかみ成長を促える力や、遊びを面白く導いていく保育センス(ミクロの視点)に支えられている。保育実践記録に取り組む姿勢が保育実践を支える ④⑤
42	伊東 麻衣子、大豆生田啓友	幼児の主体性を尊重した運動会への変容過程—園長の語りを通して—	保育学研究(61-2)137-148, 2023	外部とのつながりによる新たな視点を得た園長によるマネジメントにより、過去の経験や園の歴史による固定観念を問い直し、対話を重ね子どもへのふさわしさを追求していく組織へと変化したことが運動会の変容につながった。研修参加の機会を設け新たな保育観を開拓する必要がある ①⑤
43	楠ひとみ	「保育の現場」から「子育て支援の場」への移行に伴う保育者の保育観/保育者観の変容	北海道大学子ども発達臨床研究(18)25-42, 2023	篠藤や連和感を乗り越えるための学習、仲間・同僚からの支え、保護者からの学び、自身が親になることによる「他者の視点」の獲得により子どもの育ちをより重層的に捉えることが可能になる ④⑤
44	佐々木 沙和子、小泉 篤他	4 年制総合大学における保育者養成課程の学生の保育観及び保育者としての専門性の形成に関する意識—保育実習に焦点をあてて—	帝京大学高等教育開発センターフォーラム(10) 163-174, 2023	「他学年と学び合う機会」により他者の考えや価値観を知る事が内省を通して保育者像や保育観について考えることにつながる。実習指導と他科目を関連づけた学びの積み重ねと、保育者像や保育者観を意識することができる授業内容の改善が必要。実習を重ねることで「自分流」の教育理念のもとで実習を経験し、自分の保育観や保育者像と向き合う機会になる ②
45	谷川友美、米持広美	乳児保育目における Name tag creation の中で見えてくる学生の姿—教育成果(保育観の形成)からの一考察—	別府大学短期大学部紀要(42)27-37, 2023	乳児の視点に立つ経験となつような授業の工夫、子どもの人権・人格を尊重する倫理観、学びを振り返り自ら考える機会をもつことが必要である ②
46	菊池篤子、豊田 明子 他	学生が主体的に取り組む「子育て支援活動」2—保育観の形成に向けた実践活動—	名古屋柳城女子大学研究紀要(4)135-146, 2023	「学びの循環」の3項目(「知識・技術面」「実践面」「仲間との協働性」)を図示することで客観的に自己分析し、今後の学びの方向性を示すことができる。3 項目を意識することで保育観をもち、今後どのような保育者像を目指すのかという保育観形成の一助となり得る ②
47	天野佳和	大津市立保育所における障害児保育実践と保育者の保育観の形成過程についての研究—1970～80年代に着目して—	滋賀大学大学院教育学研究科論文集(25)1-11, 2023	大津市は障害児保育を原点にして「みんないっしょ」の新しい保育実践に取り組んだ。人権問題の意識、行政による制度導入、公立保育所全体の民主的視点、行政の公的責任を果たそうとする意識の高さ、公立私立を超え対話的共感的に学び合う関係、保育実践から学ぶ姿勢が要因となる ①④⑤
48	磯村正樹、鈴木裕子	子どもの人権に対する保育者の潜在的な意識—「子どもの意見表明権」を焦点として—	保育学研究(62-1) 67-78, 2024	経験の少ない保育者は集団をまとめようとする意識に寄って子どもの意見表明権を侵害する可能性が高まり、熟練後期保育者は子どもや支援に多面的に向き合う視点や管理運営的な視点によって意見表明権への意識が相対的に高まる。経験年数以外の要因を今後の追求する ④
49	田中浩二、梅木幹司 他	保育者の経験年数が保育の行動や意識に与える影響—保育の質向上に向けた取り組みの検討—	至誠館大学研究紀要(11)17-26, 2024	経験年数を積み重ねることで指導計画の作成や保育実践において種々の情報を参考にし、生活や遊びをより意識し先の見通しをもち、知識や技術に自信をもっている傾向がある。経験年数以外の背景については今後吟味する必要がある ④
50	千葉直紀、酒井 真由子 他	ライフストーリー法による保育者志望学生の予期的社会化過程の分析—保育者観の形成に着目して—	上田女子短期大学「所報」(3)11-42, 2024	幼少期の保育の原体験が、養成校での経験や学びを通して、保育者観の形成に寄与する。インフォーマルな場での友達と悩みを分かち合い自分の経験を促え直す経験や、専門的知識や技術(養成校での経験や学び)や子どもの存在により保育現場での困難を乗り越えている ②③
51	鈴木健史	保育観の変容を目的とした園内研修のあり方—園内研修の研究動向から—	東京立正短期大学紀要(52)88-101, 2024	保育観の変容を目的とした研修は「知識伝達型」「問題解決型」「省察型」の3つの型を組み合わせている。保育者が省察や問題解決を体験できるような工夫や仕組み、継続的かつ日常的に保育を振り返る機会の保障が重要である ⑤
52	満上敦子	保育者養成課程科目「保育・教職実践演習」を媒介とした理論値と実践知の往還を図る授業改善の取組—学生の振り返りにみえる保育観の変容に着目して—	西日本短期大学総合学術研究論集(14) 61-70, 2024	授業の振り返りを通して実習で学んだ実践知と課目学習で習得した理論値が相関しながら新たな保育観を再構築する。授業での学びが保育観形成の起点となり、実習経験による実践知が学生たちのもつゲシュタルトな保育観を描きぶり、新たな保育観の形成に寄与する。 ②

保育者の通った養成校や実習園、集団主義保育などの幼児教育理論からの影響をあげている²⁰⁾。生活教育やモンテッソーリ教育、理想とする保育者の出会いなども保育観形成の大きな要因となることが指摘されている^{10) 21) 22)}。それぞれの理論がどのような影響を与え、どのような保育実践に結び付いていったのか個別のプロセスの解明が求められるだろう。

各保育者養成施設による、学生の保育観形成のための授業の工夫についての研究も多々なされており、例えば井口・生野は修正指導案の作成と実習園の観察を通し、見直し、振り返り、改善するプロセスを学ぶことが保育観形成や変容を支えるとしている。実習と事後の振り返りはそれまでの漠然とした学生の保育観を揺さぶり、自覚させる²³⁾。また多世代間交流や他学年との交流など他者との交流による、自己の省察や、自ら考える機会を保障するなどの工夫も保育観形成につながるとされている^{24) 25)}。千葉・酒井他もいうように、養成校での経験や学びによって身に付けた専門的知識は保育観の根幹となる²⁶⁾。養成施設の教員自身も、学生への影響を鑑み、自らの保育観を省察すべきであろう。保育観形成や変容に特に大きな影響を与える経験となる実習を、学生がどのように経験し、どのように捉え直したのか仲間と共に振り返る機会の保障が重要となる。また、受けた教育と実習園でのギャップに保育観が揺らぎ、混乱する場合があるとの指摘もあり²⁷⁾、そのフォローも大切である。保育観形成を支えるカリキュラムの開発につながるために、養成施設入学までの学生の過去の経験や実習の捉え方など、丁寧に把握することが必要となってくる。

Ⅲ－3. ③個人的経験

保育者養成施設の学生のそれまでの人生経験や保育者の個人的私的人生経験も、保育者の保育観形成や変容の要因の一つであるとする研究は、表1の1、5、8、12、25、26、27、31、40、50である。学生や保育者の語りから、両親からの影響や、幼少期の原体験、子どもとの接触体験、被教育者としての経験などが、漠然とした保育観を形づくることが示されている^{10) 26) 28)}。幼少期の保育施設における良い思い出や中学校以降の子どもとの接触体験が、保育者へのよいイメージをもたせることも明らかになっており^{29) 30)}、保育者を目指す学生を増やしていく為にも、学生や保育者の個人的な過去の経験を探り、必須経験を保障していくことが求められる。子育て経験も保育観変容の大きな要因となることが明らかになっている^{20) 31)}が、子育て以外の私的経験について詳細な語りはあまり見受けられない。

パーソナリティも保育観形成にかかわると指摘する研究者も多く^{11) 28) 32)}、永倉は自分の弱さをさらけ出せるような人間観もその人の保育観を形づけるものであるとし、保育者の揺らぎや葛藤に丁寧に迫りながら保育者に共通するものに迫る研究の重要性を唱えている²⁸⁾。保育者の個人

的経験や、人間性を幅広く探る研究が求められるだろう。

Ⅲ－4. ④保育実践上の経験

子どもとの関わりや昇進など保育者となってからの保育実践上の経験を保育観形成や変容の要因としている研究は、表1の1、7、8、11、12、14、18、23、26、27、30、34、39、41、43、47、48、49である。香曾我部は、社会的状況の変化の中における保育者の保育観形成や変容の過程を明らかにしたが、より暗黙化した日常的な保育実践の中から探ることを課題としている¹²⁾。保育は、子どもと保育者との相互作用の中で営まれるものであり、子どもとの関わりによって、保育観も変容する。特にこれまでの保育観が通用しないような障害をもった子どもとの出会い²⁰⁾や貧困地域での教員経験¹⁰⁾などが、保育者を揺さぶり、保育観の見直しを迫る機会となると示されている。

保育経験年数が保育の質の向上と相関関係があるとする研究がいくつか報告されているが^{32) 33) 34)}、全てにおいて相関されるわけではなく、どのような経験が要因となるのか明確にはされていない。しかし、正規職員になる、先輩となって後輩の指導をする、管理職として運営するなど立場が変わることにより保育観が変容するとの報告がなされている^{30) 35) 36)}。磯村・鈴木は立場が変わったことで、視野が広がり多面的な視点を得ることができるようになるのではないかと指摘している³⁵⁾。ただ保育実践を長く経験すれば保育観が変容し、保育の質向上につながるというわけではなく、多面的な視点を得ることによって、それまでの価値観が揺さぶられることにより無意識の保育観を自覚し、さまざまな立場の人の視点にたって考える経験が重要であるといえる。特に経験の浅い保育者がどのように視野を広げていくのかを探ることが、サポートにつながるのではないだろうか。

Ⅲ－5. ⑤園内外の研修サポート

暗黙化された保育観を自覚し、葛藤を乗り越え、保育観を見直すためには、園内外の研修や仲間の支えが重要であると指摘しているのは、表1の2、6、9、11、12、16、18、20、22、23、31、35、36、38、40、41、42、43、47、51である。園内研修のさまざまな方法と効果について多々示されており、エピソード記録³⁷⁾やリフレクション³⁸⁾などがあげられている。入江・内藤は園内研修の中で特別に配慮を要する子どもとの関わりにおける保育者の困り感を切り口にしたこと、具体的に子どもの活動を予測することにつながるような計画や記録の書き方を工夫したことにより、省察の深化につなげたことを報告している³⁹⁾。佐藤・数井は乳児院保育者が「よくわからない子ども」に対してもつ保育観を考察する中で、子どもの状態に応じて保育観を変容させる「循環型」の保育者と、断片的・恣意的で不明確な変わりにくい保育観をもつ「固定型」の保育者の2つのタイプを明らかにした。「固定型」の保育者は原因探しに陥りやすく画一的で固定した対応になりやすいため、

自らの保育観の変容を望んでいないような「固定型」保育者への支援が課題となるとした⁴⁰⁾。そのためには保育観が形成に至ったプロセスを理解した上で、自らの保育観の自覚や変容につなげていく支援が必要になるだろう。

園外研修など外部とのつながりをもつことは保育者に負担感を感じさせることもあるが、新たな視点を得る機会として重要である。他機関との連携、研究会、継続的な研修、養成校の授業の工夫などでも指摘されていたが、研修において実践者の主体性が大切であり、受け身では変容につながりにくい。鈴木は「知識伝達型」「問題解決型」「省察型」の3つの型を組み合わせる工夫の必要を示し⁷⁾、三宅・久保田は継続的な研修の中で参加者が主体的に取り組み、省察する中で新たな問いが生まれていくというプロセスを繰り返すことが大切であるとしている⁴¹⁾。

また園内外の研修と共に、語り合える仲間との対話的関係が保育者のさまざまな葛藤を支え、省察を促すことが示されている^{11) 12) 13) 31) 42)}。学生が、インフォーマルな場で友達と悩みを分かち合い自分の経験を捉え直すことも明らかになっており²⁶⁾、省察を支えるものとしてのコミュニティ作りは必須となる。また保育実践の気づき体験を語る機会の保障⁴³⁾、若手保育者を支えるサポート体制⁴⁴⁾も望まれている。伊東・大豆生田が指摘する様に、自園の人間関係の中だけでは多面的な視点が得られず、固定概念となってしまう場合もある¹⁹⁾。天野が明らかにした大津市の取組¹³⁾のように、園内だけではなく園外に「仲間」をつくるシステムの構築も必要になる。これまでの研修の効果を報告した研究の知見は、新たな研修方法の参考になるだろう。

IV. おわりに

対象の論文を分析した結果、保育観形成や変容を支える5つの要因を抽出し整理したが、それぞれの要因は互いに絡まり合っている。保育者の生育歴から保育観形成に迫った永倉²⁸⁾や、ライフヒストリーを用いて研究した香曾我部¹²⁾や浅井³⁰⁾がいるが、日常的な保育経験からの影響については課題とされている。一人の保育者に着目し、5つの要因を包括して、葛藤や揺らぎなども含め保育観形成や変容のプロセスを詳細に迫る経験が必要になるだろう。本稿で得られた知見をもとに、どのように保育観を形成していたのかの過去の文脈と、これからどのように保育観を変容・再構築させていくのか未来の文脈を長期的に捉えながら、現在の保育観形成や変容をどう支えるかを探る研究につなげていきたい。

文献

- 1) 文部科学省：幼稚園教育要領。2018.
- 2) 古賀松香：保育実践という具体的状況に生きる保育者

- の専門性。保育学研究, 59 (1), 137-150, 2021.
- 3) 小川博久：遊び保育論。萌文書林, 220-257, 2010.
- 4) 松本佳代子：保育者の保育観に関する研究動向。共立大学家政学部紀要, 65, 143-154, 2019.
- 5) 鯨岡峻：子どもの心を育てる 新保育論のために－「保育する」営みをエピソードに綴る－。ミネルヴァ書房, 2018.
- 6) 吉村香：保育者の語りに表現される省察の質。保育学研究, 50 (2), 64-74, 2012.
- 7) 鈴木健史：保育観の変容を目的とした園内研修のあり方－園内研修の研究動向から－。東京立正短期大学紀要, 52, 88-101, 2024.
- 8) 蓮井和也・中平絢子・高橋敏之・片山美香：保育教諭の保育観に関する研究動向と課題－幼稚園教諭・保育所保育士としての保育経験の違いに着目して－。岡山大学教師教育開発センター紀要, 12, 243-255, 2022.
- 9) 井上明美：日本の保育観の歴史の変遷からとらえる保育－保育の質の向上を目指して－。花園大学社会福祉学部研究紀要, 28, 35-44, 2020.
- 10) 田甫綾野：保育実践者の保育観や「構え」はどのように形成されたか－ある保育者のライフストーリーを通して－。日本女子大学大学院紀要, 11, 35-48, 2005.
- 11) 奥山順子：保育者の資質としての「遊び」理解－保育者の「語り」にみる保育観形成過程－。秋田大学教育文化学部研究紀要教育科学部門, 63, 13-23, 2008.
- 12) 香曾我部琢：保育者の転機語りににおける自己形成プロセス－展望の形成とその共有化に着目して－。保育学研究, 51 (1), 117-130, 2013.
- 13) 天野佳和：大津市立保育所における障害児保育実践と保育者の保育観の形成過程についての研究－1970～80年代に着目して－。滋賀大学大学院教育学研究科論文集, 25, 1-11, 2023.
- 14) 矢藤誠慈郎・森俊之・野田美樹・鈴木智子・青井夕貴・森美利花・石川昭義・大倉健太郎・西村重稀・館直宏：認定こども園化に伴う保育者の専門性のあり方の変化に関する研究。日本保育協会保育科学研究所「保育科学研究」, 8, 24-44, 2017.
- 15) 芦田宏・秋田喜代美・鈴木正敏・門田理世・野口隆子・小田豊：多声的エスノグラフィー法を用いた日独保育者の保育観の比較検討－語頻度に注目した実践知の明示化を通して－。日本教育方法学会紀要「教育方法学研究」, 32, 107-117, 2006.
- 16) 劉海紅・倉持清美：日本と中国の保育者の保育観。東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ, 61, 51-64, 2010.
- 17) 中村紘子：デンマークの「森の幼稚園」における保育観－「詩的ファンタジー」に着目して－。お茶の水女子大学子ども学研究紀要, 4, 79-89, 2016.
- 18) 山田朋未：異文化における保育経験者から見る保育観

- の変容と異文化体験の意義－青年海外協力隊員へのインタビューを通じて－。お茶の水女子大学子ども学研究紀要, 5, 105-118, 2017.
- 19) 伊東麻衣子・大豆生田啓友：幼児の主体性を尊重した運動会への変容過程－園長の語りを通して－。保育学研究, 61 (2), 137-148, 2023.
- 20) 梶田正巳・杉村伸一郎・後藤宗理・吉田直子・桐山雅子：保育観の形成過程に関する事例研究。名古屋大学教育学部紀要, 37, 141-162, 1990.
- 21) 吉岡一志：保育士の成長を支える信念の形成過程－ある保育士のライフヒストリーを中心に－。広島大学院教育学研究科紀要第三部, 56, 101-108, 2007.
- 22) 清水陽子：保育者の保育観と実践力の形成について－阿部静江の経歴と活動を中心に－。西南女学院大学紀要, 9, 216-223, 2005.
- 23) 井口真美・生野金三・松田典子：教職実践演習の実証的研究～保育観・授業観の形成を志向して～。実践女子大学生生活科学部紀要, 50, 21-38, 2013.
- 24) 芝田郁子：教職実践演習にみられる短期大学保育科学生の学びと変容－幼老統合ケアの実践活動を通して－。名古屋柳城短期大学研究紀要, 41, 117-134, 2019.
- 25) 佐々木沙和子・小泉篤・石川素子・目戸郁衣・杉本真理子・芦澤清音・草野いづみ・平沼晶子：4年制総合大学における保育者養成課程の学生の保育観及び保育者としての専門性の形成に関する意識－保育実習に焦点をあてて－。帝京大学高等教育開発センターフォーラム, 10, 163-174, 2023.
- 26) 千葉直紀・酒井真由子・木村光男・紅林伸幸・山口美和・中村瑛仁：ライフヒストリー法による保育者志望学生の予期的社会化過程の分析－保育者観の形成に着目して－。上田女子短期大学紀要, 3, 11-42, 2024.
- 27) 阿南寿美子・命婦恭子・篠木賢一・笠修彰・末寄雅美：保育者養成校における保育者としての資質に関する調査～変数間の関連性の分析～。西南女学院大学紀要, 25, 113-122, 2021.
- 28) 永倉みゆき：保育者の保育観はどのように形成されるのか－藤野敬子の生育歴に関する検討－。お茶の水女子大学子ども学研究紀要, 6, 33-45, 2018.
- 29) 渡貫由季子・武藤安子：高校生における保育観の形成とそれに影響を及ぼす要因－自我発達との関連で－。日本家政学会誌, 55 (2), 135-144, 2004.
- 30) 浅井かおり・浅井拓久也：保育士の保育観形成過程についての一考察－TEM図の分析を通じて－。東京未来大学保育・教職センター紀要, 特別号, 1-5, 2017.
- 31) 櫛ひとみ：「保育の現場」から「子育て支援の場」への移行に伴う保育者の保育観/保育者観の変容。北海道大学子ども発達臨床研究, 18, 25-42, 2023.
- 32) 渡邊望・永利陽一：保育観による保育行動の違い。九州女子大学紀要, 54 (2), 177-191, 2017.
- 33) 横山草介・関山隆一：保育者の実践観の変容に関するヴィジュアル・ナラティブアプローチ。保育学研究, 58 (2・3), 155-166, 2020.
- 34) 田中浩二・梅木幹司・廣瀬春次・水津玉美：保育者の経験年数が保育の行動や意識に与える影響－保育の質向上に向けた取り組みの検討－。至誠館大学研究紀要, 11, 17-26, 2024.
- 35) 磯村正樹・鈴木裕子：子どもの人権に対する保育者の潜在的な意識－「子どもの意見表明権」を焦点として－。保育学研究, 62 (1), 67-78, 2024.
- 36) 八代陽子：前期ミドルリーダーにおける後輩との関わりと保育観の変容プロセスの一考察－TEAによる分析から－。保育学研究, 60 (1), 161-172, 2022.
- 37) 白井はる奈・林悠子：対人援助者に求められる援助観－乳児保育における熟練保育士の語りの分析を通して－。佛教大学社会福祉学論集, 11, 11-30, 2015.
- 38) 村井尚子・坂田哲人：保育実践のリフレクシオンの意義に関する一考察－保育観の問い直し－。京都女子大学発達教育学部紀要, 18, 33-43, 2022.
- 39) 入江礼子・内藤知美・太田佐恵子・井上紀子・水澤典子・三浦加奈子・杉崎友紀：園内研修初期段階における保育実践の変容とその諸相－特別に配慮を必要とする子どもへの注目を契機として－。鎌倉女子大学紀要, 9, 1-10, 2002.
- 40) 佐藤みよ子・数井みゆき：乳児院保育者は「よくわからない子ども」をどのように捉えるのか？。茨城大学教育実践研究, 23, 225-240, 2004.
- 41) 三宅浩子・久保田真規子：多様性の尊重とインクルーシブ保育－継続的な園内研修が保育者に与える影響－。宮崎学園短期大学紀要, 13, 109-117, 2021.
- 42) 宮本雄太：附属幼稚園の保育を支える保育者の視座。福井大学教育学部附属幼稚園ベテラン保育者のライフヒストリーに基づく検討。福井大学大学院福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科教師教育研究, 14, 399-414, 2021.
- 43) 吉田満穂・高橋敏之・西山修：自伝的記憶としての気付き体験による保育者の変容過程。岡山大学教師教育開発センター紀要, 6, 38-48, 2016.
- 44) 小原敏郎・入江礼子・白川佳子・上垣内伸子・酒井幸子・内藤知美・吉村香：保育者の保育観に関する研究－保育経験年数、保育所・幼稚園の違いに着目して－。保育士養成研究, 31, 57-66, 2013.